



からころ様、お元気ですか。

秋乃

【八月拾五日

からころ様と呼ばれる奇妙な神の噂を聞く。

何でも、白紵(しろがすり)の着物に身を包み、糸柱目の一本歯下駄をからころと鳴らし、人間の子供と一緒に遊ぶそうだ。きっと古風な子供の神様だろう。

盛夏の節にはどこからともなくふらりと現れ、夏が終わればいつの間にやらいなくなり。害はなく、からころ様とよく遊んだ人間には幸運が訪れるという。

そんな神様がこの町にはいるのだそうだ】

カランコロン。

まだ昼前だというのに強烈な日差しを投げつける太陽を尻目に、小気味良い音がアスファルトの上を跳ねる。正面から歩いてくる人間はだれもがしかめっ面で下を向き、汗を拭き拭きどうにかしてこの暑さを乗り切ろうと必死だ。

必然的に、そんな顔とすれ違うたびにこっちも滅入る。やれやれ、こういう時は涼しい秋の歌でも口ずさんでー。

「もう！　ヘタな鼻歌なんて歌ってないで私の話を聞いて下さい！」

物事には常に例外・異端というものが付き纏う。白といえば黒と反発する政治家しかり、ろくすっぽ働きもせず、ただぐうたらしている働きアリしかり。地獄の釜の中にいるような暑さの中でも涼しい顔をして、むしろこっちがおかしいのかとってしまう暑苦しい夏の申し子しかり。

「……お前は暑くないのか？」

思わず歩きながら声をかけてしまうと、俺はすぐに後悔した。背後で麦わら帽子が大きく揺れた気配がした。

「はい！　だって暑くないとこう『夏！』が来た感じがしないじゃないですかー」

「そりゃあ物好きなことで」

顔よりふたまわりも大きい麦わら帽子に、膝まである白いノースリーブのワンピースといった爽やかな装い。古風なおさげ髪を揺らして風鈴のように涼しげに笑う色白の夏の落とし子が、きっちり俺の後をついて来ているはずだ。

「で。で。今日はどこに行くんですか！」

「探偵を名乗るなら、俺の行き先くらい推理できるだろう？」

「む。いいでしょう、えーと……あ、ちょっと！　聞いておいてどこに行くんですか！」

「それを推理しろって言ってるんだよ」

俺が一步前に進むたびに自称・探偵少女も負けじと歩を進める。

カラン。

「もー！　ちょっと待って下さい。推理しますからー」

コロン。

「……今、喉まで結論が出かかって……」

カラン。

「あ！　……飲み込んだじゃった」

コロン。

「おい。俺は暇じゃないんだ」

呆れながらしぶしぶ振り向くと、俺の胸に顔をぶつけそうなくらいまでの距離に歩いてきていた少女とぼつちり目が合った。小柄なその少女は顔を上げて、深く被った麦わら帽子の間から覗く、井戸の底のように吸い込まれそうな双眸を少しだけ細めると、にっこり笑って言う。

「嘘でしょう？」

「失礼だな」

セミが短い命を燃やし、深緑が山々を多う夏真っ盛りの小さな町で、俺は今日も今日とてセミよりうるさいのにつき纏われている。

「まったく、なんでこんな暑苦しい奴に絡まれなきゃならん」

「こんな美しい奴？」

「あ・つ・く・る・し・い・奴だ！」

すれ違った買い物帰りらしい主婦が、訝しむような視線を少女に向けて去っていった。やれやれ、これだけ騒いでいれば当然か。少女の見かけによらないふてぶてしさが一種不気味でもある。

「お前こそ、俺に付き纏う以外にすることはないのか」

疑問ではない。それだけこの少女が最近俺の前に頻出しているということだ。しかし麦わら帽子の少女は、一拍おいて首を水平に振る。

「からころ様こそ、わたしに付き纏われる以外にすることないんですか？」

いや、その切り返し方はおかしいだろう。

「理不尽なストーカーの台詞にしか聞こえないぞ」

まったく、ああ言えばこう言う。だが、ストーカーというのもあながち間違いではない。この少女、数日前に突然俺

の前に現れてからというもの、俺が行く所行く所にまるで待ち構えていたように出沒するのだ。

「で、今日はどちらに？ 山ですか？ 海ですか？ あー、この時期の海はいいですね。照りつける太陽！ 灼熱のビーチ！ それに……」

「目の保養」

「白い波打ち際！」

せっかく補完してやったというのに、自身がイマドキの太陽のように暑苦しい少女は、心底不服そうだった。

「ああ、そうですかそうですか。からころ様は随分と浅い考えですねー、海と違って」

「座布団はやらんぞ」

「どちらかといえば浮き輪を所望します」

再び背を向けて歩き出した俺に向かって少女が続けた。

「私は泳げないのです」

「だろうな。しかし浮き輪を使う場所かどうかわからないだろ？」

「人間、諦めと引き際が肝心です」

つまり推理は諦めたのか。おおよそ探偵が口にする台詞ではなかった。

黙っていればどこか名家のお嬢様然とした端正な顔立ちをしているくせに、その小さな口から吐き出されるのは狂おしい愛の言葉などではなく、ろくすっぽ考えていないだろう軽口の数々。

いちいち相手をするのも面倒なので、ここは俺の方が一歩引くべきか。

「おーい」

少女が正面に回りこんで頭一つ分違う俺の顔を見上げてくるが、意図して俺は少女を無視して真っ直ぐに歩き続けた。

。

「さっきから人の話聞いてまっすかっ！ ねえってば！」

「……」

「私、泣いちゃいますよ？」

ったく。泣かれたら俺が悪いみたいじゃないか。

「……おい。小娘探偵さんよ」

「なんですか？」

「探偵ならその基本は？」

「はいっ！ 張り込みと尾行です！」

こんな時だけ良い返事だ。嬉しそうな顔を向けてくる。

「よろしい。なら、巻かれても文句言うなよ」

「え？ あ、ちょっ！ うべっ！」

走りだすと、焦って転んだ少女の姿がみるみる小さくなる。その転ばぬ先の杖は何のためにあるんだ。

「からころ様ー！」

おい、そこで泣きながら大声で俺を呼ぶな。

カラン。コロソ。

【八月十五日

からころ様というのはいわゆる町に古く伝わるみんかんでんしょうのたぐいらしい。

なつのあいだ外で日をあびて元気にあそべば子供はけんこうになるという。一しゆのきょういくほうしんなのだろう。

からころ様は、いない。

私が……しかしのこされた時間はどれだけある——口おいしい】

「それで？ 結局どこに行くんですか？」

膝と手の平を擦り剥いたことでだいぶ大人しくなった少女を引き連れ、俺は好きな歌を口ずさみながらずんずんコンクリートジャングルを進んでいく。蝉の音がビルの谷間に反響して、命がけのオーケストラが今年の猛暑を盛大に盛り上げている。

「ロバート・バーンズにでも会いに行くかな」

「え？」

俺の言葉に疑問を投げ掛ける麦わら帽子の少女探偵。どこか嫌そうな顔なのは、理解できないことを言われるのが嫌いということなのだろう。

「まさか！ こんなたいけな少女を連れ込んでー」

「心配しなくても俺の好みはぺったんこのまな板より、凹凸のあるグラマラスボディだ、と。ほら、着いたぞ」

小さな公園に入ると、砂場で遊んでいた小さな子供たちが一斉にこちらを向き、駆け寄って来た。羞恥と憤怒を秘めた自分の胸を片手で隠しながら、もう一方の腕を振り上げて今まさに俺を殴らんとしていた少女は、そのまま振り上げた右手を子供たちに振ることになった。

「小僧共！ 喜べ、遊び相手暇そうな奴を連れてきてやったぞ」

「げ」

「あ、むぎわらねえちゃんだー！」

「むぎわらねえちゃーん！」

不満げに俺を睨むおさげの少女だったが、溜め息を吐き、満面の笑みで走ってくる子供たちに手を振り続けるその横顔は、なんだかんだでまんざらでもなさそうだった。

「ふん！ 貴様らごときが私に挑もうなんて百年早いわーっ」

「きゃーっ！」

悪者の指揮官のような台詞を叫び、麦わら帽子の少女は薄い胸を張って輪の中心へと踊り出す。そんな少女に、格好も顔つきもばらばらな子供たちがわらわらと群がって行く。

麦わら帽子におさげ髪の夏の少女とは、数日前にこの場所で初めて会った。ベンチに腰掛けて幼い少年少女の話し相手になっているのを見た時は、久方ぶりに驚いたものだ。

数日前と同じ場所に立ち、好きな歌を口ずさみながら、俺は少女の第一声を思い出す。

『私の顔に何かついていませんか？』

「なんであの時、あんなこと言っちゃったんだか」

らしくないことをした。確かに驚いたが……お陰でここ数日調子が狂って仕方がない。まあ調子といっても気分的なもので、体調はといえば悪い時などここしばらくはない。

「ひやあ！」

間抜けな声が声が聞こえて顔を上げてみると、尻餅をついた麦わら帽子が子供たちに纏わり付かれて悲鳴を上げていた。

それが普通とは違う異様な光景なのは、幼い少年少女たちはみな体の一部ないし全部が、少女の体にめり込んでいたからだ。

「からころ様一、呑気に歌なんて歌ってないで助けてー」

「何やってんだか……」

地面から首だけ出している少年。ふわふわと宙を漂っている少女。その全ての子供たちが、みな一様に半透明な姿をしている。

この子供たちはみな、事故や病気で幼くしてこの世を去った幽霊たちなのだ。そしてこの間抜けに腰を抜かしている探偵少女は、そんな幽霊たちの姿を視て話すことができる稀有な人間だった。

俺が近づいて行くと子供たちは口々に失礼なことを叫んでさっと少女から離れると、各々好きなことをして遊び出した。

「うー、鳥肌がー」

「張り込みと尾行が基本なら、探偵にとって忍耐力は命だろ？ なのにそんなんじゃ見えてるものも見逃すぞ？」

「私は短期決戦型の探偵なんですよー。耐えることになる前に、蹴散らす！」

「そんなに血気盛んな主人公の推理小説じゃ、犯人は一ページで自白しそうだな」

さぞかし薄っぺらい本になることだろう。最後の最後までもったいぶって真実は口にしないのが名探偵のセオリーだというのに。

「からころ様って変わってますよね」

「あ？」

唐突にそんな失礼なことを言われ、思わず眉根が寄る。

「だって」

「『幽霊と遊ぶ私に変な顔をしない』……ってか？」

こくと首肯する麦わら帽子。

「面白い顔はしていますが」

「その顔は余計だ。まったく、俺からすればお前のほうが十分変わっているさ」

「自覚していますよー」

ふふっと笑った向日葵畑に、一瞬だけ陰が差したのには気が付かないふりをした。夕立のように僅かな間だったが、幽霊が視えるこの少女が抱えているのは、明るい色の花束などではないのだと実感するのには十分だった。

だが、俺はそれを聞く気はさらさらない。深入りすれば、情が移る。

「麦わら姉ちゃん。早くー」

向こうでは半透明な少年少女が、ぶんぶんと半透明な腕を振って少女を呼んでいる。

「早く成仏させろって呼んでるぞ」

「う、嫌な言い方しますねー」

「ほら、早く行ってやれ。あいつら放って置くと厄介な地縛霊になるぞ」

「わかりました、わかりましたよー！」

口を尖らせ、しぶしぶ少女がおさげを揺らして駆けて行くのを見て、俺はすっとその場を後にした。

さて、俺も行かなきゃな。

カランコロン。

はちがつじゅうごにち

じかんない、からころさまなんでたすけてくれないこんなにみなくなるしんでいるどうして。たすけなきやわたし――】

【



目の前にあるのは墓だ。そう言われなければ分からないだろう。

墓石の代わりにと地面に突き立てられた大きな金属片は年月の経過で錆にまみれ、下手くそな字で彫られた死者の名前はかすれてしまってほとんど読めない。背の高い金の穂先が赤茶けた金属の周囲を取り囲み、町を一望できる小高い丘の上を吹き抜けた寂しがりやの風が、そんな黄金色(こがねいろ)の海をさわさわと波立たせては人々の営みへと帰っていく。入道雲が湧き立ち、蟬の音が夏の体温を思い出させるこの場所だけは、今も昔も変わらない。

俺は物言わぬかつての友人に話しかけた。

「相変わらずここはいいな。夏でも風が涼しい」

俺みたいなこの世の理から外れた奴の言うそれは嘘か誠か。生きている人間に聞けば分かることだ。

「お前もそう思うだろ？」

「はい」

背後から澄んだ声が聞こえた。振り返れば、言うまでもなく夏の落とし子のような少女だ。

「よくここだって気づいたな」

「『誰かさんと誰かさん』」

「ほう。驚いたな」

「嘘つきー。よく言いますよ、気がついて欲しくてわざと繰り返し口ずさんでいたくせに」

気がついて欲しくて。そう確信を突かれると、言い返す言葉もない。

俺は、少女にこの場所へと来て欲しかったのだ。

俺が視える少女に……この場所に。

「ロバート・バーンズに会いに来ました」

向日葵はしたり顔で小首を傾げてそう言う。

どうやら探偵を気取るだけのことはあるようだ。

汗だくの少女は両手を後ろ手に組み、にししと白い歯を見せて笑うと、組んだ手の中で杖をぐるりと回した。

「でも俺は元の歌しか歌ってないんだがな？」

「う……。えー、オホン！ スコットランドの国民的詩人、ロバート・バーンズ。日本でも有名なものは『蛍の光』と『故郷の空』、ですね。故郷の空は原題『Comin Thro' The Rye』……直訳すればライ麦畑で出逢えたら」

正解。

目をつぶってスラスラと語りながら、少女は白い杖を嬉しそうにくるくると回している。

少女が言った方の歌は、一世を風靡した国民的コントグループの替え歌。しかし歌詞の内容は大衆向けには煽情的で、何より翻訳されたものより元の詩の雰囲気にも忠実でもある。ならば、あの時俺がロバート・バーンズの名前を出した時の少女の反応も意味合いを変える……あれは知っていたからこそそのものか。

「くくっ」

「あー、何かいやらしいこと考えてますねー？」

それはお前だろう。

探偵を名乗る少女の博学さに舌を巻きながら、あえて俺は何も言わずに、しばらく少女の困惑する顔を眺めることにした。

確かにアイツによく似ている。

「まあでも、こうして見事に出逢えました。いやー、からころ様がまたいなくなっちゃった時は焦りましたけど、けど！ さすが私！ 今時ライ麦が自生する場所なんてそうそう多くないですからね。登ってくるのは大変でしたけど」

ここは町を一望できる小高い丘の上。いくら道は整備されているとはいえ、この少女一人で来るのは大変だったろう。しかもこの場所に来るには途中で道をそれなければならない。俺が驚いたのはそんな理由もあってのことだった。

「あ。そこまで少年探偵団に送ってもらったんで、そこまで苦労はしてないです」

小さいのによく回る頭だ。俺の考えを読んだかのように言った少年探偵団とは、あの公園の子供の幽霊たちのことだろう。きっと彼らは今頃、探偵ごっこに勤しんでいるに違いない。

それに、と少女はおさげ髪を揺らしながら、自分の推理を披露する名探偵のように薄い胸を張って自慢げに言う。

「本当に言いたかったのはこっちじゃないですか？」

少女がポケットから差し出したのは、文庫サイズの一冊の本。青とクリーム色のツートンに分かれたシンプルな表紙

「キャッチャー・イン・ザ・ライ」

これも、正解。

ライ麦畑で捕まえて。大戦後間もないアメリカを舞台に、主人公が学校の寮を追い出されてから家に帰るまでの三日間の彷徨を描いた物語。言い換えればたったそれだけの家出話。しかし、名作だ。

「私だってこのくらい有名な小説なら多少は知ってます。……でも、あなたがこの本から私に何を伝えたいのか、それにどうしてこの場所に呼んだのかとか、全然分かりません！」

分かりません。口をへの字に曲げて言い放った少女の口調には、自分が知らない・分からないことへの不満が滲んでいた。その子供っぽい様子に、口角が緩む。

「あなたはなぜこの場所を知っているんですか？ 母から聞きました。ここは……私の曾祖父のお墓です」

町並みが一望できる崖の上。地面に突き立てられてから長い年月が経った物言わぬ金属の墓石が、揺れる麦穂の中にひっそりと立っている。

「曾祖父は、戦争で負った怪我が元で精神を病み、長い間入院していたそうです。しかし時折病院を抜け出し、白い着物に一つ歯の下駄を鳴らして子供たちと遊んでいたことから『からころさん』と呼ばれ、周りからは変人扱いされていたのだと聞いています」

変人。

そうか、アイツは変人か。

「亡くなっても親族とは同じ墓に入れてもらえず、今もこうしてここに眠っていることを、私もさっき知ったばかりなんです……」

話すうちに、少女の声はどんどんか細く、弱くなっていく。

「しかし曾祖父が亡くなってしばらくしてから、町では毎年この季節になると、からころ様という、幸運をもたらす神様の噂がまことしやかに囁かれるようになった……。そして実際に、からころ様に会ったという子供は健やかに育ったそうです……。だから！ 私は……、私はからころ様を名乗るあなたに聞きたいんです」

真実を。そう言う少女の口調は真剣そのものだった。しかし、同時に拭い切れない違和感も、少女の吐く言葉を覆っている。

「それは、お前がアイツの子孫だからか？」

「私が本当のことを知りたいからです！ だから――」

なるほど、探偵。

知りたい、理解したい。その言葉に恐らく嘘はないのだろう。しかし、

「それだけじゃないだろう」

努めて冷酷に言うと、少女は口に手を当てて息を飲む。

「その目。死んだ人間しか視えないなんて難儀だな」

「……」

少女が初めて恨みがましく俺を睨む。手に持った視覚障害者用の白杖に、目深に被った麦わら帽子。その下から俺を視ている暗い二つの黒は、光というものを捉えることができないのだ。

「医者からは手術すれば治るかもしれないとかなんとか言われてるんだって？ ああ、悪いな、俺は噂話に鼻が効くんだ。それがどんなに些細な噂でもな。……お前、手術を受けるのに確かな裏付けが欲しくて俺に言い寄ったんだろう」

『幸運』なんていう保証が欲しくて、俺らしくもなく厳しい口調で言うと、少女は俯き黙りこんでしまった。

凶星か。まあ、当然だろう。幸福(シアワセ)を求めること、それ自体は人間ならなんら不思議なことじゃない。

俺がこの場所を少女にほのめかしたのには理由がある。

一つは人の目がないこと。それならここじゃなくてもよかったが、二つ目の理由はこの場所である必要があった。それは……ここなら嘘がつかないこと。

「けど残念だったな」

少女が、ではない。

過去の鎖に縛られた俺は、この場所ではどうしても嘘がつかないのだ。

「幸運なんて、からころ様なんて……本当は全部存在しないだよ」

少女の肩から力が抜けるのが分かった。手から離れた白杖がライ麦の海に沈む。

向日葵の少女にはきつい言葉を吐いた。綺麗な嘘で固めた口当たりの良い言葉は、飲み込みやすいが毒になる。もうこれで、俺を追って『幸運』なんてありもしない、幻想を追いかけることもなくなるだろう。

情が移るから深入りしないだって？ はっ！ 自分の台詞ながら笑わせる。

勇気を持って手術に望むかどうか、あとは少女次第だ。

ライ麦畑がざわりと揺れた。

「……私は手術なんて受けません」

「ん？」

それは意外な言葉だった。

「怖いからか？ だから俺に付きまとして幸運を――」

「幸運なんて、くれると言われてもいません！ 私は、この目が……この目で生まれたことが幸せなんです」

幸せ？ 聞き間違いだろうと思った。

「嘘をつくなよ。人の持っているものを自分が持っていないくて、代わりに人が忌み嫌うものを与えられた人間が幸せなはずがねえ！」

「何で嘘だと思うんですか！ 曾祖父の気持ちを理解してくれたあなたが！」

ぐっと顎を上げ、見えない瞳で真っ直ぐに俺を射抜く少女の真摯な顔は、本当に昔のアイツにそっくりだった。

「私には、亡くなった方の強い想いも視えるんです。そして、あなたの心が曾祖父を想って悲鳴を上げているのも、私には視えます。……もう隠さないで下さい！」

少女は両拳を握って顔の前まで持ち上げると、泣きそうな顔でこう言った。

「私はあなたを助きたいからここに来たんです！」

――俺はお前を助きたいんだ！

「ぶっ」

「へ？ あれ？」

「くくく……」

思わず吹き出してしまった。アイツの子孫が、アイツと同じように俺を説得する。それも、こんな小娘に。そんなの、誰が想像できる？

「わ、私何か変なこと言いましたか？」

――何かおかしいこと言ったか？

「あっはっはっは！」

「ちょ、ええっ！？ 何で！？」

なるほど。血は争えない。断って一生後悔したことなのに、その曾孫にまた同じことを言われるなんて。長生きはするもんだな……つと、俺はとっくに死んでいたっけか。

「はっはっはっは！」

実に愉快。こんなに愉快的気分になったのは何十年ぶりだろうか？

一度こみ上げた笑いの波はなかなか引いてくれなかった。

がんじがらめに縛られているのだと感じていた過去の鎖が、少しずつ思い出の糸となって解けていく。いつの間にか負い目という結び目を作って、自分で自分を縛り付けていたのだと気づくと、残っている結び目の数なんて、もう気にならなくなっていった。

「はっ……いやー悪い。どうも昔の間抜け面な奴を思い出してた」

「その間抜け面の血筋を感じるんですが……」

少女は落としていた白杖を拾い上げると、辺りの地面をその先端で調べながら口を尖らせる。ちょうど俺の隣に麦穂の隙間を見つけて腰を下ろすと、口元とは逆に嬉しそうな視線が俺を見上げてきた。

「それで『真実』。話してくれる気になりました？」

「なんだ。そっちは嘘じゃなかったのか」

「当然！ 私は探偵ですよ。からころ様の真実、つまびらかにするまでつき纏いますよー！」

「やれやれ」

呆れる口調にもどこか楽しげな感情が滲んでしまう。少女の方もそれを分かっているのか、「お、こんな可愛い娘につき纏われて嬉しいんですねそうですね？」などと、軽口が戻ってきた。

「俺はな」

気付けば言葉にしていた。

「広いライ麦畑で遊んでいる子どもたちが、気付かずに崖っぷちから落ちそうになったときに、捕まえてあげるような、そんな人間になりたい」

「……主人公のホールデンの言葉ですね」

「お前のひい爺さんの好きな言葉でもあった」

「！」

少女から視線を逸らし、俺は随分と変わってしまった町並と、変わらないライ麦の海原を見下ろす。

俺は、この場所で嘘はつかない。

「からころ様っていうのは、アイツがホールデンの夢みたいになりたいって考えだした、架空の神様のことだ。戦場から命からがら帰ってきたアイツが、戦後の高度経済成長の中で、育ち盛りなのに貧しく、食べる物にもこと困っているような子供たちを見続け、ぶっ壊れた頭で必死に考えた綺麗事から生み出された偽りの神だ。白緋の着物を着て、糸柱目の一本歯下駄をカラコロと鳴らしながら、遊んだ子供に幸運をもたらす……そんなの誰が信じる？」

だって自分がまさに不幸なんだぜ？

横目でちらりと見た少女の顔は帽子で隠れて見えなかったが、呼吸すら忘れたように微動だにせず俺の話聞いてる。

俺は今、どんな顔でアイツを語っているのだろうか。

「……けど、アイツは自分が作ったそんな偽物を、病院を抜けだしてまで……そして自分が死ぬまで演じ続けた。確かに戦争から帰ってきたアイツはそりゃあ身も心も酷い有様でな、廃人って言葉がしっくりくるほど心を削り取られていた。けどな、そんな男だからこそ、僅かに心に残った想いは強かった」

八百万。付喪神。この国では強い想いの込められたものには神が宿するという。

「なら強い想い自体に神が宿ってもおかしくはない。だろ？」

「もしかしてあなたは――」

少女の言葉を遮って、町全体が悲しみの悲鳴を上げるように、けたたましいサイレンの音が鳴り響いた。

「時間だな」

八月一五日。

正午。

六十八年前の今日、この国は戦争に負けた。

少女と共に、俺も黙祷を捧げる。

そして、アイツにも。

「あれ？ からころ様？」

サイレンが止むと、少女の暗い瞳にも、もう俺の姿は映らないようだった。

「からころ様ー？ どこですかー？」

そう呼びながらも、カンの鋭い盲目の少女は気がついていようだろう。

からころ様。そんな神様なんてどこにもいやしない。全部、俺が広めた噂話だ。

アイツが壊れた頭で夢見た希望なんて、結局半世紀以上過ぎた今でも夢のままだ。

「まだ私、お話全部聞いてないですよー！」

けど、それがホールデン(アイツ)の夢なら、今度は俺がライ麦畑から落ちそうになる子供たちを捕まえてやりたい。

噂話なんかじゃなく、今度は本物のからころ様として。

「もう！ 私は全部聞くまで絶対に諦めませんからね！」

忍耐は嫌いじゃなかったのか？

「からころ様一つ！」

カラン。コロソ。